



西池袋醫院

進士 英雄先生

しんじ・ひでお／2000年に東邦大学医学部を卒業。東邦大学医療センター大橋病院などを経て、12年に「西池袋醫院」を開業。日本内科学会「総合内科専門医」、日本循環器学会「循環器専門医」。

どの患者さんも自分の家族のように 日々の健康相談に耳を傾ける

地域に根ざした「かかりつけ医」を目指す、進士英雄先生。

病院は下町の住宅街にあり、常連の患者さんが多い。

十人十色の患者さんの希望を尊重しながら、最期までその人らしい“生”に寄り添う。

医学部の学生時代から、全身を診て命を守る医師になりました。生死をさまようような重篤な病状でした。医療チームの頑張りで、その患者さんは生還し、元氣になってご自身で歩いて帰れるほどに回復されて。その姿を見て、医療者側が頑張れば頑張るほど救われるこの分野にとってもやりがいを感じて、専門は循環器を選びました。

循環器の代表的な病気といえば、動脈硬化性疾患。例えば心臓の場合、心臓に酸素を供給する血管の内腔が狭くなり、血流が低下する狭心症、その血管が完全に詰まってしまうのが心筋梗塞。基本的に、こうした病気は、生活習慣病のある人が段階的になりやすい。病院勤務を経て開業医となった進士先生は今、地域の「かかりつけ医」として、大きな病気になる前から患者さんの健康に関われるよう心がけている。

「とくに高齢者は加齢と共に筋力が弱ってくるので、入院すると身体機能は加速度的に下がり、寝たきりになってしまいます。そうならないように管理するのが、かかりつけ医の役割。定期診察の際に「大丈夫」ということを確認するのも大事な仕事のひとつです」

通院している患者さんの約4割が後期高齢者となり、目下の課題は健康寿命をいかに延ばせるか、そのための健康管理だ。



診療所には、循環器系の検査に必要なレントゲン室（左）とエコーと心電図（右）がある。「健康診断で心雑音を指摘されて、うちでエコー検査をして弁膜症を発見する、というケースも多いです」

〈院内診察〉 気軽に相談できる、街の 健康コンシェルジュとしての役割

毎週水曜日には大学病院での外来診療へ。外科的治療や入院もできる大学病院と、日常的に健康相談を受ける開業医の両面から、患者の状態を診る。診療所のメリットは、ずっと同じ先生に診てもらえる安心感だ。「担当の患者さんは、名前だけで性格や病状がパッと思い浮かぶ」という進士先生。高齢者は月に1回ほど診療所に顔を見せて、健康チェックを受ける。「75歳以上の後期高齢者になってくると体力や免疫力が低下してくるため、ちょっとしたことで基礎疾患の悪化や身体機能の低下をきたすことがある。普段の様子が変わらないとちょっとした異変を察するのはむずかしいので、高齢者ほどかかりつけ医の存在が必要になってくると思います」

〈訪問診察〉 24時間365日、何かあれば 駆けつけられる距離感で

平日の午後は、通院困難な患者さんを訪問。24時間365日、患者さんと向き合う日々だが「忙しくて疲れていても、患者さんからの感謝の言葉で一発で元気になる」と、笑顔ではにかむ進士先生。「以前は歩いて診療に来ていた患者さんが、だんだん歩けなくなり、在宅医療に移行する。最期は家で迎えたいという人も増えています。介護の環境が整っていれば、なるべく本人の希望に応じてご自宅で看取りたいです」

右／訪問診療グッズ。血圧計や聴診器、心電図など。下／持ち歩き用のノートパソコンとプリンター。診療所にある電子カルテにアクセスして、遠隔操作で処方箋を出す。

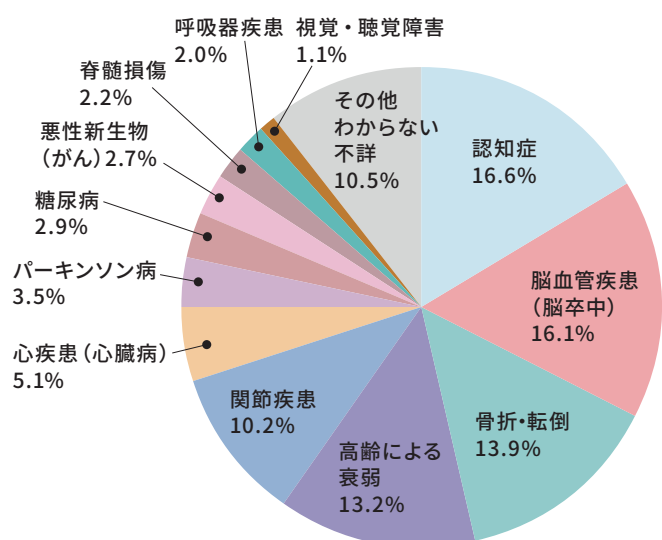


〈生活指導〉 最期まで自分らしく 暮らせるように

食べ過ぎ、喫煙、甘いもの……。生活習慣病になる危険因子は、日々の悪しき習慣に潜んでいる。「やめた方がいいのはわかっているけど、痛い思いをしないとなんとかしようと思わないのが人間の性^{さが}」と考える進士先生は、日々の生活指導にも力を入れる。

「介護や支援が必要となる主な原因疾患として、脳血管疾患や心疾患、骨折や認知症が挙げられますが、これらの原因は結局、生活習慣病に行きつくんです。生活習慣病は症状がないので放っておかれがちですが、歳をとればとるほど全身に出てきます」

介護や支援が必要となった主な原因の構成割合



2022(令和4)年国民生活基礎調査（厚生労働省）より

